

シドズ夫人のマクベス夫人

Mrs. Siddons as Lady Macbeth

野口 孝行

NOGUCHI Yoshiyuki

Mrs. Siddons, the elder sister of John Philip Kemble, played the most impressive Lady Macbeth in the 18th century and in the stage history of *Macbeth*. Her style of acting was called classical, and some spectators did not like it after the turn of the century. Still, her performances of the role were so notable that they were the source of some legendary anecdotes, perhaps the most striking of which is the one that Irish playwright Sheridan Knowles swore to American actor Edwin Forrest that he had smelt blood as he was watching her sleep-walking scene. This paper tries to depict her acting of the part with her brother and argues how her Lady Macbeth impressed her audiences so much.

いつの時代になろうとも、誰がどんな演技をしようとも、『マクベス』の上演史に決して欠くことのできない舞台がある。シドズ夫人 (Mrs. (Sarah) Siddons, 1755-1831) のマクベス夫人である。伝統的な『マクベス』を代表する舞台が、マクベスではなく夫人を演じた女優の名で知られているのは意外なことのようと思われる。確かにこの作品の前半でマクベス夫人は主導的な役割を果たしてはいるが、これはあくまでもマクベスの悲劇であり、彼女は後半、第3幕の「宴の場」以降は意識のない状態で歩く「夢遊病の場」にしか登場していない。しかもこの舞台でマクベスを演じていたのは、この時代を代表する俳優の一人で、彼女の実の弟でもあるジョン・フィリップ・ケンプル (John Philip Kemble, 1757-1823) である。それでも、この舞台はケンプルのマクベスとしてでもケンプル姉弟

の『マクベス』としてでもなく、「シドズ夫人のマクベス夫人」として知られているのである。彼女が演じたマクベス夫人のすばらしさ、それが当時の観客に与えた印象の強烈さは並大抵のものではなかったことが窺える。

彼女のマクベス夫人には当時からいくつものエピソードが残されており、この舞台は今日でも伝説的なものとなっているのである。彼女が服地屋で生地を購入する際に、「でも、これ洗えるのかしら」と聞かれた店員が一瞬恐怖で凍り付いてしまったというのもその内の一つである。¹ これは、深夜、彼女が演じるマクベス夫人が、ダンカン殺害のときに手に染みついたと知っている血の臭いを無意識のうちに洗い落とそうとしている場面を、この店員が思わず思い出してしまったからだろう。あるいは、大海原のすべての水で洗っても手についた血は消せないと嘆くマクベスに向かって、彼女が少しの水で洗い流してみせると強い口調で話したところを思い出したのかもしれない。いずれにせよ、このエピソードは、彼女のマクベス夫人としての印象の強さと、これら衝撃的な場面で彼女が観客に与えた恐怖の大きさを物語っている。

『マクベス』は、シェイクスピアの時代から高い人気を保ち続けている作品である。それでも、封鎖されていた劇場での上演が再開された王政復古期には、改作の憂き目にあっている。この時代は民衆の嗜好に合わせて様々な改作がなされ、シェイクスピアの多くの作品も改作されたものが上演されていたのである。『マクベス』は、1660年に劇場が再開されて間もない64年にダヴェナント(William Davenant)が改作している。彼の死後も、73年と74年に改作版は出版されている。これらは、ストーリーの大幅な変更はなかったものの、今日われわれが知る『マクベス』とはかなりかけ離れたものになっていた。バンクォーとマクダフの息子は舞台上で殺されず、彼らの死は報告されるだけとなり、逆にマクベスは舞台上で息絶えるが、その首が持ち込まれることもなく、残酷で血なまぐさい印象が軽減されている。また、門番は削除されて「二枚舌」のテーマは希薄なものになっているが、罪深いマクベス夫妻との対比のためマクダフ夫妻の場面は拡大され、作品に道徳的な意味合いが加えられた。何よりも、シェイクスピアの詩的で難解な表現が簡単な言葉に書き換えられたせいで、台詞の奥深さが減り、シェイクスピアの作品とはかなり違った印象を受ける劇になってしまった。「きれいは汚い、汚いはきれい」(Fair is foul, and foul is fair.)² という冒頭の魔女たちの謎めいた台詞も、「私たちには、いい天気は悪い、悪い天気はいい」(To us, fair weather's foul, foul is fair!)と書き換えられ、単なる天候への言及

にとどめられている。そして、その最も顕著な違いは、魔女たちの場面を合唱と踊りでふくらませたことである。³ 今日であればマクベスの悲劇を台無しにする信じ難い改作と非難されるところであるが、改作は時代の嗜好を反映したものであり、当時の『マクベス』のヒットは改作だったからこそのものであった。当時の民衆は魔女に対する関心も強く、また、劇場での歌や踊りも非常に人気が高かった。この劇を好んで9回も観たサミュエル・ピープス(Samuel Pepys)も、66年1月7日の日記に「あらゆる点で非常に優れている劇であったが、深刻な悲劇であるにもかかわらず、特に娯楽において優れていた。これは悲劇としては奇妙な完璧さであるが、この作品においては適切でふさわしい」と記している。⁴ まだ今日のようなオペラもミュージカルもない時代であったことを考えてみると、この人気の高さにも十分うなずけるし、ダヴェナントの発想は時代の求めに応じたものであったばかりでなく、かなり斬新なものでもあったといえることができるだろう。

もう一つ、この時代の『マクベス』の人気を支えたのは、名優ベタートン(Thomas Betterton, c.1635-1710)の演技であった。彼は丸顔で、体格もマクベスの頑強さを十分表現できるほどではなかったが、彼はこの時代を代表するイギリスの俳優で、見事な台詞の朗唱を得意とし、特に悲劇での演技が優れていた。ピープスも彼の熱烈なファンの一入だった。ベタートンは当時の宮廷人の服装をし、型にはまった仕草と自然で控えめな感情表現でマクベスを演じた。1709年のニコラス・ロウ編纂によるシェイクスピア全集にある『マクベス』の挿絵には、半円形の帽子をかぶり、丈の短いコートを着て、洞窟の中で大釜を挟んで魔女たちと向き合っているベタートンが描かれている。左手でコートの下に刺した剣のさやをつかみ、左足を一步踏みだし右手で剣をつかもうとしている彼の姿は、動揺しているマクベスを演じるには堅苦しく見える。彼だけでなく、片手で杖を持ち、もう一方の手を差し伸べている魔女たちも、背後でマクベスを諷めるように左手の人差し指を立てているバンクォーの幽霊も非常に様式的なポーズである。これは写真ではないのでその正確さを過信することはできないのだが、これが紛れもなく舞台上のベタートンを描いたものであるなら、演技の詳細はともかく、画家にこの絵のインスピレーションを与えた舞台の様子が概ねこのようなものであったと想像することも、一概に間違いとはいえないだろう。ベタートンは夫婦でマクベス夫妻を演じ、生来の気高い気性に反し、野心家の夫人にせき立てられてダンカンを殺害するという演技をした。魔女たちの歌と踊りに彩られ、宮廷人姿の人気俳優ベタートンが美しい朗唱、型にはまった動きと自然な感情表現で演じる、立派な人物としてのマクベスが、王政復古期のロンドンの人々を大いに楽しませ、絶大な

人気を誇っていたのである。

本来のシェイクスピア劇復活の動きは 1744 年に、ときのシェイクスピア編者ジョンソン博士やウォーバートンとも親交があった俳優、ギャリック (David Garrick, 1717-79) が試み、説明的に書き換えられた味気ない台詞がシェイクスピアのものに戻され、この劇も本来の『マクベス』にだいぶ近づくことになる。しかし、相変わらず人気が高かった魔女たちの歌と踊りは残されたままであったし、逆に、舞台上で死んでいくマクベスの台詞は 1 行だったものが 9 行に拡大されてもいる。この年 1 月 7 日に、彼がドルーリー・レイン劇場で「シェイクスピアが書いた」と銘打ってマクベスを演じたことは、彼のライバルであったクイン (James Quin, 1693-1766) を当惑させた。クインは、自分が 20 年来演じていた『マクベス』はシェイクスピアが書いたものではなかったのか、怯えて青ざめた召使いを叱りつけるマクベスの「そのガチョウ面はどうしたんだ」(Where got'st thou that goose look?) という奇妙な台詞はいったいどこから持ってきたものなのかをギャリックに尋ねたという話もある。⁵

台詞は復活させたものの、相変わらず魔女たちの歌と踊りに彩られた『マクベス』であったし、描かれた姿を見る限りではギャリックもかなり気取ったポーズをしているが、彼の舞台はベタートンの「気晴らし」にもなりうる舞台とは決定的に違っていた。彼は所々に金色をあしらった深紅のスーツに巻き毛の鬘という 18 世紀の英国軍人の服装で登場し、マクベスの様々な感情の変化を見事に演じた。ベタートンが見事に台詞を朗唱したのに対し、ギャリックはあくまでも自然な台詞回しを心がけ、シェイクスピアによる韻文の台詞さえも感情的に話したのである。台詞の言い方だけでなく、演技もまた、その人物の感情を観客に存分に伝えるものであった。観客が彼の演技を通してマクベスが感じていた期待や恐怖、不安を理解し、それらを共に感じる事ができたことをトマス・ウィルクスが以下のように説明している。

(ギャリック演じるマクベス)の中に(ダンカン殺しの)意図から行為への罪の進展を見るのは興味深い。魔女たちの予言を聞いて、どのように王冠への遠い野心が芽生えたのか、彼が殺人を犯すことにどれほど躊躇して、妻の悪魔のような説得に屈したか、宙に浮かんで見える短剣を見て決心が揺らぐが、やがて寝室の鐘の音を聞いて決心するのを彼はどれほど見事に演じたことだろう。ダンカンを殺した後、血まみれの両手に血の付いた短剣を持って戻ってきたときの彼の表情の恐ろしさはとても描写できるものでは

ない。彼が「やったぞ」(I've done the deed!)と言い、その後自分の両手を見て「悲惨な光景だ」(This is a sorry sight!)と言ったとき、彼の声がどれほど観ている者の血を凍らせたことだろう...

ウィルクスの文章にギャリックの演技が具体的に書かれていないのが残念だが、ギャリックの声と表情と演技がマクベスの心情を余すことなく伝えていたことは十分理解できるし、彼の演技がピープスの日記に書かれているベタートンのものと対照的な演技だったことも想像できる。

ギャリックは迫真の演技で知られている俳優であるし、この劇の緊迫した場面では巧みな感情表現でマクベスの繊細さを存分に伝えたのだが、そうでない場面では自然な演技を見せた。バンクォーを殺して戻ってきた暗殺者1に「顔に血が付いてるぞ」(There's blood upon thy face.)と彼が言ったとき、この役を演じていた俳優が、芝居が進行中だったにもかかわらず、つい台詞ではなく本当にギャリックに話しかけられたものと勘違いして驚いてしまったというエピソードもある。⁶

ウィルクスの描写からも分かるように、ギャリックもまた、ベタートン同様生来の性格に反して王を殺害するマクベスを演じた。伝統的なマクベスの人物像は根っからの悪党ではなく、「本来は立派な人物」であった。彼は決して自ら積極的にダンカンを殺害しようとするのではなく、殺害に対して激しい嫌悪さえ抱いている。魔女たちの予言もまた、合唱や踊りで彼女たちにややコミカルな雰囲気を与えられていたため、その神秘が希薄なものとなっていた。自らの野心も魔女たちの予言も、間接的な要因になってはいたものの、彼を王殺しへと駆り立てるのは、主に夫人の説得であった。ギャリックの舞台で恐ろしいマクベス夫人を演じて彼の演技を支えたのはプリチャード夫人(Mrs. (Hannah) Prichard, 1711-68)である。ウィルクスの文にも「妻の悪魔のような説得に屈し」という表現がある。小柄なギャリックが迫真の演技でマクベスの繊細さを演じて成功を収めることができたのは、少なからず彼女がマクベス夫人の恐ろしさを十分表現したおかげだったことは彼自身も感じていた。彼のマクベスの人気が高まったのは彼女が夫人を演じた1748年以降であったし、彼女が引退した68年以降、彼はマクベスを演じていない。この二人による『マクベス』は、本来は誠実であったマクベスと、野心に燃え、強固な意志を持ったマクベス夫人というイメージを樹立することになったのである。そして、この路線の最高峰に立つのが、端正な顔立ちで長身の弟ケンブルをマクベスに配したシドンズ夫人のマクベス夫人で

ある。

セアラ・ケンプルは、主に地方公演を行う劇団の経営者ロジャー・ケンプルと彼の妻セアラ・ウォードとの間の 12 人兄弟の長女として 1755 年 7 月 5 日に生まれ、母親からは名前と共に美貌を受け継いだ。彼女は子供の頃からこの劇団の舞台に立っていたが、両親は、将来のため彼女にできるだけよい教育を受けさせ、特に音楽の教育に熱心であった。しかし 17 才になる頃、彼女は父の劇団の俳優ウィリアム・シドンズに見初められ、二人はすぐに恋仲になってしまう。彼女を上流階級の家嫁がせようと思っていた両親はこれに猛反対し、彼女を家庭教師として貴族の家に住み込ませるなど何とかして二人を引き離そうとしたのだが、彼女はすぐに劇団に復帰し、両親も二人の結婚を認めざるを得なくなり、73 年 11 月に二人は結婚した。以後彼女はシドンズ姓を名乗り、俳優の道を歩むことになる。二人はともに父の劇団で演じていたが、75 年 12 月に彼女はギャリックが経営していたドルーリー・レイン劇場の檜舞台を踏むことになる。このときはまだ彼女の才能も認められるまでに至らず、翌年の夏に解雇されてしまうが、6 年間の巡業の後 82 年 10 月に再びドルーリー・レインに復帰したときには、彼女は比類なき悲劇女優としての名声を手に入れた。画家レノルズ卿に「悲劇の女神」(‘The Tragic Muse’) という肖像画を描かせたその美貌に加え、彼女のよく通る声、感情豊かな演技、優しさと威厳を兼ね備えた女性らしさは、観客ばかりでなく彼女と共演する俳優たちにも愛された。彼女の最大の役柄が 1812 年の引退公演でも演じたマクベス夫人であり、最終的には彼女はこの役を 17 年まで約 40 年間にわたって演じ続けた。

彼女より二つ年下の長男ジョンもまた、幼い頃から父親の劇団で演じていたが、彼を聖職に就かせたいと思っていた両親は、そのために彼をフランスのドゥエに留学させた。元々ロジャー・ケンプルも育ちのよい役者であり、自分の子供たちには安定した道を歩ませようと考えていたのである。しかしジョンもまた、そんな父親の期待を裏切って舞台に復帰したため、父の逆鱗に触れて勘当されてしまった。血は争えないというべきか、親の心子知らずというべきか、いずれにせよ、二人が共に両親の期待を見事に裏切ってくれたおかげで、われわれは上演史に輝かしい名を刻む姉弟を持つことになったのである。彼もまた地方巡業の後、姉より 1 年遅れて 83 年 9 月にドルーリー・レイン劇場に登場し、そのハンサムな顔立ちと紳士らしい優雅な身のこなしで、それまでのものとは全く異なる高貴な印象を持つハムレットを演じて、彼はたちまちスターの座に上りつめた。彼はまた、ドルーリー・レイン、コヴェント・ガーデンの二大勅許劇場の経営にも携わり、経営でもいく

つかの改革を試みたが、1808年の火事で焼失したコヴェント・ガーデンの再建にかかった膨大な費用をいくらかでも穴埋めするために料金の高いボックス席を増設し、入場料も値上げしたときには、観客の間に悪名高い「OP（旧価格）騒動」（O.P. riot）を引き起こさせてしまった。新劇場のこけら落としは、ほかならぬケンプル姉弟による『マクベス』。値上げ幅はわずかだったが、ケンプルは観客の理解を得ることができず、彼らの反感は歴史に名を残す大舞台をも怒号で埋め尽くすほど強いものとなったのである。彼の最大の役柄は、シドンズ夫人がヴォラムニアで共演したコリオレイナスであった。経営再建のためとはいえ、観客の反感を買ってOP騒動を引き起こさせ、（最終的には観客の要望を受け入れたものの）二ヶ月の間騒動に屈しなかったケンプルには、民衆の共感を得る術を知らなかったために国を追われたコリオレイナスに共感するものもあったのだろう。観客からも熱烈に支持され、彼はこの役を1789年から引退する1817年まで繰り返し演じ続けた。彼は容姿に恵まれながらも、声の悪さと堅苦しい動きはときに痛烈に批判されることもあり、喜劇での人気は振るわなかった。それでも彼は、1814年にエドモンド・キーン（Edmund Kean, 1789-1833）がドルーリー・レインに登場するまでの四半世紀にわたって、姉と共にロンドンの劇壇を支配し続けたのである。

シドンズ夫人のマクベス夫人は偉大な舞台となるのだが、1779年、彼女が初めてマクベス夫人を演じる前夜、台詞を覚えようと台本に目を通していたときには、彼女はそのあまりの恐ろしさのため読み進められなくなってしまった。初めは夜の静けさの中で落ちついて読み進めていたのだが、殺害の場面までくると、彼女は「蝋燭をつかみ、恐怖に震えながら急いで部屋を出た。絹のドレスを着ていたので、寝室への階段を上がる時に衣擦れの音がして、不安のため幽霊に追いかけているように思え」、部屋に着いても「蝋燭を消すこともできずにテーブルの上に置き、服を脱ぐこともできずに急いで横になった」のだと、彼女は後に語っている。⁷

彼女はこの頃はまだマクベス夫人の人物像について深く考えていなかったと言っているが、その6年後、1785年にドルーリー・レインでこの役を演じる機会を得たときには、完全に役作りができていた。⁸ しかし、彼女がこの困難な役になりきろうと集中していた本番直前に、劇場の経営者であった劇作家のリチャード・シェリダンがいきなり強引に楽屋に押し入り、彼女に「夢遊病の場」での演技を変更するよう抗議したという話がある。彼は、彼女が灯りを持たずに手を洗う仕草をするつもりであることを聞いて、驚き、不安になったのだという。彼女は、灯りを持ったままではマクベス夫人と侍女の台詞から考えら

れるほどの強さで手を洗うことはできないと説明したのだが、彼は、プリチャード夫人はいつも灯りを持ったまま演じていたので、そんなことをしたら生意気な演技と思われてしまうと言うのだ。ロンドンの観客には、まだそれほど強く彼女の演技が心に残っていたのである。シドズ夫人が自分の演技をするためには、いまだに残るこの偉大な女優の亡霊と戦わなければならなかった。しかし、この緊張と不安の瞬間に今更変更など間に合うはずもなく、彼女は自分自身の演技を試みた。そして彼女は大成功を収め、大歓声を浴びた。シェリダンも舞台が終わった後再び楽屋を訪れ、彼女が考えを曲げなかったことを心から喜んだ。⁹ この日、シドズ夫人のマクベス夫人がプリチャード夫人のマクベス夫人に取って代わったのである。

「夢遊病の場」での手を洗う仕草だけでなく、彼女のマクベス夫人像も斬新で独創的なものであった。プリチャード夫人はマクベス夫人の強さと恐ろしさが誠実で繊細なマクベスを動かすように演じたが、シドズ夫人は彼女が野心的で意志が強いだけでなく、美しく非常に魅力的な女性でもあり、マクベスは彼女に魅了されているから困難や危険にも立ち向かうのだと考えた。シドズ夫人の「マクベス夫人の人物像についての見解」(以下「見解」と記す)には、「この驚くべき人物は、心の奥で激しい野心がほかのすべての人間性を消し去った女性であり、人を従わせるすべての知力と共に、美しさの持つすべての魅力と優雅さを兼ね備えている。...このように心の強さと女性らしい美しさを兼ね備えていることこそが、マクベスのように勇敢で気だてのよい立派な英雄の心を魅了し、彼に現在のすべての危険と将来のすべての恐怖に立ち向かわせた魅力となりえる...彼女に心を奪われているマクベスは時折彼女に優しい言葉をかけているのだが、この恐ろしい企みに完全に呑み込まれている夫人は、劇後半で二人が心の平安を失い、苦しみを共有し、彼女の心が優しさを取り戻すまでは全く夫に愛情を示していない」と書かれている。¹⁰プリチャード夫人はギャリックのマクベスに立派な軍人の印象を与えるために、嫌悪すべき悪役としてマクベス夫人を演じて彼の演技を支えたのだが、シドズ夫人は美しく魅力的な女性としてこの役を演じ、マクベスだけでなく観客までも、その美しさで魅了したのである。

ケンプルが演じるマクベスもまた、ギャリックのものとは異なっていた。身長と容姿に恵まれ、落ち着いた雰囲気を持つケンプルは、それらを生かして、威厳ある軍人としてマクベスを演じたのである。彼は丈の短いウールのコートを着て、鎖かたびらに格子縞の肩掛けというスコットランドの氏族長の服装をし、スコット卿 (Sir Walter Scott) が帽子に付けてくれたという一本の大きな鷲の羽が彼の額にかかっている。¹¹第 1 幕第 3 場、彼は

堂々たる足取りで舞台に登場し、魔女たちに遭っても過剰に驚いたりせず、落ち着いていた。「待て、舌足らずめ、もっと話せ...」(Stay, you imperfect speakers, say more...)という台詞も、彼は堂々として威厳を保ったまま、しかも韻律を壊さずに言った。次の場面でマルカムがカンバランド公に任命されたときも、彼は落ち着いて聞いていた。¹²彼の演技は、これらの場面で強い驚きを表現したギャリックと対照的で控えめな印象を受けるが、ケンプルはあくまでもマクベスの偉大な軍人としての威厳を重視して演じたのである。ここに、偉大さと繊細さを併せ持つマクベスを演じる難しさがある。ギャリックはマクベスの驚きや動揺を見事に表現してこの役で成功を収めることができたのだが、そのために他の人物たちが述べているようなマクベスの軍人としての偉大さを薄れさせてもいたのである。

ケンプルはマクベスの威厳を重視するあまり観客の目には感情表現が控えめに映ってしまったが、シドズ夫人は表情、仕草、台詞回しなどすべてを駆使してマクベス夫人を演じた。彼のマクベスに観客が物足りなさを感じたのには、彼女の圧倒的な演技力との対比もあっただろう。それほど彼女のマクベス夫人は強い衝撃を与えるものだったのである。スコットランド法の教授、ジョージ・ジョーゼフ・ベル (George Joseph Bell) が彼女の演技を詳細に書き残しているが、ケンプルの演技についての記述が少ないのもそのためである。¹³

シドズ夫人は、従来のマクベス夫人のように、当時のスカートの裾を大きくふくらませた優雅な服装ではなく、古典的な動きやすい質素な茶色の服で登場した。¹⁴第1幕第5場、彼女は手紙に目を通しながら登場し、台詞の箇所からは声を出して、「こちらが燃えるような思いでもっと聞きたいと思ったとき、彼女たちは...」(When I burn'd in desire to question them further, they made themselves...)のところで言葉を切り、十分な間をおいてから不思議そうに「空気...となって消えていった」(air,...into which they vanish'd.)とつぶやいた。このときの彼女の様子は、実際に魔女たちと遭遇したマクベスとバンクォーよりもはるかに不思議に思っているようだったという。¹⁵手紙を読み終え、シートンが登場して王が来ることを伝えると、彼女は動揺から落ち着きへの変化の大きさと気持ちを切り替える素早さを見せた。ここは、夫を王にする計画に囚われているため、マクベス夫人は彼の言葉を夫の帰宅を知らせるものだと取り違え、思わず彼を叱りつけるのだが、すぐに思い直し、企みが露見するのを恐れて取り繕うという、シェイクスピアの見事な心理描写が際だつところである。シドズ夫人はこの過程を十分理解して、いきなり語気を強

めて「そんなことを言うなんて気でも違ったの」(*Thou'rt mad to say it...*)と言ったあと少しの不安を見せたが、すぐに気持ちを切り替え、声を低くして穏やかに「おまえの主人も一緒ではないの」(*Is not thy master with him?*)と聞いた。¹⁶これ以降この役を演じる女優たちは皆、彼女のこの演技を踏襲している。彼が退場すると、彼女は覚悟を決めるための長い間をおいてから、低い囁き声でその恐ろしい決意を語り始めた。悪霊に呼びかけるときには、「あたかも悪夢でも見ているかのような霊的な声」だったので、ベルもこの「ゆっくりとしたうつろなささやきに恐怖で凍り付いた」と言っている。¹⁷

ケンプル演じるマクベスが登場すると、彼女は勝ち誇った様子の大きな声で呼びかけた。ダンカンが帰るのは翌日の予定だと聞くと、彼女は「いいえ、決して...」(*O, never...*)と言ってから長い間をおき、強い眼差しで彼から振り返り、今度は「決して」を強調し、瞳にも胸の中の恐ろしい決意をみなぎらせ、言葉には変化を持たせ、語を区切るようにゆっくりと、低い声で「決して、その明日を太陽に照らさせないわ」(*Never shall sun that morrow see!*)と台詞を言い直した。「彼女の落ち着いた儼かな力強さ、しっかりした姿勢、頑なな眼差し、揺るぎない決心の深い声は忘れがたいものであるが、とても思い描いたり描写したりできるものではない」とベルは述べている。¹⁸彼女は彼の方に振り返り、ここで初めて彼の目を見据えて、自分の話に対する彼の反応を見ながら「まあ、あなたの顔はまるで本のように...」(*Your face, my thane, is as a book...*)と台詞を続けるが、「無邪気な花のように見せかけて、でもその下に潜む蛇になるのよ」(*...look like the innocent flower,/ But be the serpent under't.*)と言うときにはとてもゆっくりと、儼しく、冷酷な言い方をした。このときケンプルは、「彼女の鋭い眼差し、あるいは彼の胸の中の野心の囁きを言い当てている彼女の言葉に耐えられないかのように、うなだれた。」¹⁹それでも彼女は、「あとのことは私に任せて」(*Leave all the rest to me.*)と言って一緒に退場するときには、「彼の肩を軽くたたいてなだめながら彼を誘導した。」²⁰

このあたり、いかにも姉と弟といった感じである。ベルも珍しく、これではマクベスの印象を小さく見せ過ぎてしまい、「彼女の野望に向き合おうとする彼の強い心の動きにふさわしくない」と、彼女の退場の仕方を批判している。²¹しかし、ここはマクベス夫人が夫を説得して、国王の殺害を決意させる場面である。ダンカン暗殺までは彼女が主導しているのは明らかであるし、やろうとしていることも決して偉大な行為ではなく極悪非道の大罪である。ベタートン以降ケンプルのマクベスも、単に臆病で殺人を犯せないのではなく、たとえ王位に就きたくても恩を受けている国王を殺すことに抵抗があるのである。「強い心

の動き」といっても、勇気を振り絞るというより、国王になりたいという誘惑に屈することである。いくら彼が悲劇の主人公であっても、彼の決心が立派に見えるべきではない。ここは、夫人に同意してマクベスが力強く決心するよりも、彼女が自身の女性らしさで彼を説得するというシドنز夫人の演技の方が、逆に、マクベスが本来は立派な人物に見えるのではないか。おそらく、ベタートン、ギャリックに代表される伝統的なマクベスへの時代の好みもあって、しっかりしたシドنز夫人に導かれて退場するケンプルの姿に、ベルは本来偉大な軍人であるマクベスとしての物足りなさを感じざるを得なかったのだろう。それでも、ケンプルの肩を軽くたたいてなだめながら一緒に退場するというシドنز夫人の演出は、決してやりすぎではない。

しかし、次の場面、城の前でダンカン一行をインヴァネスに迎えるときは、彼女は一変して、城の女主人として厳かに演じる。ダンカンへの挨拶の言葉も、彼女は美しく話し、彼女の台詞は「まるで音楽のようで、耳に心地よい」ものであった。退場する際も、まず上品に国王に一礼して彼を先に入らせ、貴族たちに優しく優雅に挨拶してから国王に続いて城の中に姿を消した。その様子は、決して気取ったものではなかったが威厳を備えていた。²²

次はマクベス夫人がまだ躊躇しているマクベスに殺害を決心させる第1幕第7場である。舞台にはケンプルが「やっちゃってそれで片が付くものなら...」(If it were done, when 'tis done...)と独り言を言いながら登場するのだが、ベルはこの時のケンプルの言い方が、姉のすばらしい演技と比べて、マクベスの気持ちを十分伝えるものではなかったと批判している。「(彼は)あたかも姉の演技を知らないかのように話し、まるで演説の暗唱のようであった。そこには、シドنز夫人であれば、感情の自然な表現として台詞に命を吹き込むと思われる、そういう躊躇や心の動きなどは全くなかった。」²³しかし、シドنز夫人が登場するといきなり舞台に緊張がみなぎる。「王の食事がもうすぐ終わるわ。どうして席を外したの」(He has almost supp'd: why have you left the chamber?)という「怒りと驚きを込めた囁き声」と共に彼女は現れた。自分は国王から名誉を賜ったばかりだとケンプルが話しているとき、彼女は他の誰にもできないような感情の変化を演じた。「活気に満ちた希望と驚きから失望、落胆、軽蔑、そして再び怒りへの突然の変化は、彼女以外、誰の力も及ぶものではない」とベルが賞賛している。²⁴ケンプルも、「...男らしいことならどんなことでもやってみせる...」(...I dare do all that may become a man...)という台詞は感情を込めて堂々と話した。そして、彼から離れて、冷酷に、はっきりした話し方でゆ

っくり彼を説得していたシドンズ夫人が、彼に近づき、表情を変えて彼の顔をしばらく見つめ、初めは優しく、愛情を込めて「私も、乳を飲ませたことはあるし、乳を飲んでいる赤ちゃんのいとおしさはよく知っているわ...」(I have given suck, and know/ How tender 'tis to love the babes that milks me...)と言ってから、恐ろしいエネルギーを込めて、それでも自分が一度やると決めたら、乳を飲んでいる赤ん坊を引き離して脳みそをたたき出すことだってしてみせるといふ、あの恐ろしい台詞を言った。²⁵

シドンズ夫人は、この最も非人間的と思われる台詞の中にもマクベス夫人の女性らしい優しさを読み取っている。「彼女の恐ろしい言葉の中にもこのような優しい言及がなされているので、彼女は子供に対する母親の愛情を本当に知っていて、この行為こそ、その実行に勇気が必要な最も途方もないことと考えているのだと思わざるを得ない」と彼女は述べている。彼女は母親の愛情を知っている女性にとって最も困難な行為の一例としてこのことを挙げているのだから、彼女は「野心によって完璧に冷酷になって」はいるが、本質的に恐ろしい女性ではなく、それどころか女性特有の優しさも人一倍持ち合わせているというのである。²⁶それでも一度決めたらやってみせるといふのだから、これほど意志の強さを夫に示すことのできる話は他にないということになる。

「もし俺たちがやり損なったら」(If we should fail?)とケンブルが聞くと、彼女は「手のひらを上向きにして両手を下げ、身をかがめながら」「私たちがやり損なう! (We fail!)と強い下りのイントネーションで言った。²⁷そして、自信に満ちた強い声で「ダンカンが眠りについたら 昼間の長旅のせいで深い眠りに誘われるはずだわ...」(When Duncan is asleep / Whereto the rather shall his day's hard journey/ Soundly invite him)と言ってから、再び彼に近づき、「熱心な低い囁き声で」暗殺の計画を話した。お付きの者たちを酔わせるところまで話すと、彼女は「あたかも彼の反応を確かめるかのように間をおき、それからさらに熱意を込め、声は低いままだが自信は強めながら」話を続けた。その間中、彼女はケンブルの迷いを観察し、それに合わせて熱意と話し方を調節した。「さげすみと愛情、理屈、考え抜かれた計画、彼女の見事な声色が保証する成功の確かさ」で、彼女は彼を説得した。²⁸これでは、殺害を嫌悪して決心を鈍らせている夫でも従わざるを得ないだろう。「腹は決まった...」(I am settled...)というケンブルの台詞への流れが自然なものに感じられる。

ケンブルは第2幕第1場、「短剣の場」でも冷静に演じ、観客に十分恐怖を伝えなかったことをベルは嘆いている。バンクォーとの短い会話の後、彼は目を伏せて舞台を横切り、

途中召使いを見てはっとするが、そのまま歩き続け、顔を上げると元気なくため息をついた。宙に短剣が浮かんで見ると、彼は驚いて両手で目を覆い、「恐る恐る顔を上げて、あたかもうるさい羽音がしていた虫でも探すかのように、はじめは手の上から、次に手の下から覗いた。」しかし、「そんなものはありはしない」(There's no such thing.)という台詞と共に彼は手をどけ、視野を広げた。この台詞はマクベスの目から短剣の幻覚が消えたことを意味するものとケンプルは考えたのだが、ベルは、マクベスの幻覚からの回復は短剣が見えなくなったからではなく、彼が自ら幻覚を追い払い、感覚が戻ったためだと考え、自然な表情に切り替わるとか、苦笑いと共に手で目のあたりをこするなどすべきところであると、ケンプルのここでの演技に不満を述べている。²⁹また、ケンプルは作品に対しても冷静で、服装以外でも劇の細部にこだわっている。ここで鐘の音に導かれるように退場する際、舞台効果として鐘の音は1回で十分だが、第5幕第1場「夢遊病の場」でマクベス夫人が鐘の音を「一つ、二つ」と数えるのに合わせて、彼は鐘の音を2回にした。³⁰

暗殺に向かうケンプルが退場し、恐ろしい笑みを浮かべ「あの二人を酔わせたものが私を大胆にしてくれた・・・」(That which hath made them drunk hath made me bold; ...)と言いながらシドンズ夫人が登場すると、舞台の緊張は極限に達する。1816年に舞台下手のドアの内側で、ケンプルが両手に血を塗りつけているのを見ていたJ. H. シドンズは、舞台上の彼女の囁き声でこの場面に呼び戻されたときのことを以下のように語っている。

「今やっているところだわ」(He is about it.)という囁き声で私の注意は半開きのドアに向き、場面の状況を思い出した...シドンズ夫人は聞き耳を立て、ドアの方を向いて身をかがめていた。私は、彼女の耳からすぐ近くのところだったので、その息づかいをはっきりと感ずることができた...それにしても何という囁き声だろう。劇場の隅々まではっきりと聞こえ、大声をも凌ぐものだった。³¹

ベルも、このときの彼女の様子を「苦しそうな息づかいでドアの方に聞き耳を立て」、その声は「恐ろしい囁き声」だったと記している。舞台裏からケンプルの声が響くと、彼女は両腕を上投げながら、「ああ、二人が目覚めたのかしら、やらないうちに」(Alack, I am afraid they have awakened,/ And 'tis not done.)と言って、顔に苦痛の色を滲ませた。

「父の寝顔に似ていなかったら私がやったのに」(Had he not resembled/ My father as he slept, I had done't.)と言ったあと、見つかったのではないかという不安で言葉を失ったか

のような間をおき、姿が見えたケンプルを強い囁き声で呼んだ (*My husband!*)。彼は暗闇のなか、何か恐ろしい秘密でも話すように「やったぞ。何か聞こえなかったか (I have done the deed. Didst thou not hear a noise?) とささやいた。³²

このあとケンプルが殺害の最中に次の間から聞こえてきた神に慈悲を請う声に対して「アーメン」の一言が言えなかったことを嘆くので、「こういうことはそんな風に考えてはだめ。気が変になっ`て`しま`う`わ」(*These deeds must not thought/ After these ways; so, it will make us mad.*) と言うとき、シドンズ夫人は「あたかも彼の後悔と恐怖に感染して彼女の非人間的な精神力が圧倒されたかのように、震えながら両腕を首と胸のあたりに持っていった。」さらに彼が「もう眠るな」という声を聞いたというので、彼女は不安になり、彼に近づいて彼の落ち着かない考えを日常に戻そうとする。「誰が」を強調して「誰がそんなこと叫んだの」(*Who was it that thus cried?*) と言い、そのあと彼をしっかりと見つめ、力強く彼の耳元で「ねえ、あなた、せっかくの力が萎えてしまうわよ...」(*Why, worthy thane,/ You do bend your noble strength...*) 以下の台詞で彼を元気づけた。³³

彼が短剣をおいてくるのをいやがると、彼女は乱暴に取り上げ、自分でおいてこようとするのだが、途中で振り返り、身をかがめて彼を指さし、悪意のこもった声で「まだ血を流しているようなら、お付きの者たちの顔に塗りつけてやるわ...」(*If he do bleed,/ I'll gild the faces of the grooms withal...*) と言っていったん退場した。「私の手もあなたと同じ色よ。でも心はそんなに青ざめたりしないわ」(*My hands are of your color; but I shame/ To wear a heart so white.*) と豪語しながら彼女は戻ってくるが、ケンプルは、「血まみれの両手を顔に近づけ、目はそれに釘付けとなり、額に苦痛を浮かべて、身動きせずにその場に立ち止まっている。彼女は初め、しっかりと彼を導こうとするのだが、次第に不安が忍び寄り、彼の気が変になり発覚が避けられないものとなるのではないかという苦痛に襲われ、彼の肩をたたいて彼の姿勢を崩し、無理矢理その場から引き離した。」ケンプルは「やったことを思い出すくらいなら、いっそ自分を忘れてしまった方がましだ...」(*To know my deed, 'twere best not know myself...*) と、ぼんやりつぶやきながら退場した。³⁴

ファースト・フォリオでは、第 2 幕第 3 場「発覚の場」でマクベス夫人は国王が死んだことを聞いて気絶するのだが、ダヴェナント以来ケンプルのテキストでも、この場面からマクベス夫人は削除されている。ダンカン暗殺を終えたあとシドンズ夫人が登場するのはマクベスが王位に就いたあとの第 3 幕であるが、もはやそこには、それまでの野心に燃えたエネルギーッシュな夫人の姿はなくなっている。シドンズ夫人は王妃として登場し、威厳

に満ちた声でシートンに話しかけるが、彼女の様子に野心が満たされた喜びは全くない。彼に夫を呼びに行かせ、一人になると、「何にもならない、すべては無駄...」(Nought's had, all's spent...)と、とても悲しげに呟いた。³⁵それでも、「見解」にもあるように、ケンブルが現れると、以前とはうって変わり、優しく彼に話しかけた。すでに夫を王位に就けたのだから、もはや彼女には彼をせき立てる必要などない。二人は目的を達成したものの、これまで経験したことのない苦痛が彼女の強いプライドと意志を和らげ、第3幕では、彼女も彼への共感、深い愛情といたわりを示すのである。³⁶暗殺以降気が休まることのないと言うケンブルに「...今夜、お客様の前では明るく陽気にしてらしてね」(...*Be bright and Jovial* among your guests tonight.)と言うとき、彼女は無理して言葉に元気を込めた。³⁷

ケンブルもいったんは同意していつまでも心を偽ることにしようと言うのだが、どうしてもバンクォーとフリーアンスへの不安から逃れられずにいるので、彼女は「一瞬、以前の気迫とエネルギーを取り戻して」、「でも、いつまでも自然から与えられた命が続くものではないわ」(But in them Nature's copy's not eterne.)と言った。³⁸これを誰にでも当てはまる一般論と解釈し、ここでマクベス夫人は、彼女が繰り返し言っているように、夫にそのようなことで気に病むのをやめさせようと意図していると考えるのが一般的な見方だろうが、シドズ夫人は、二人を殺すことなど簡単だと彼女が言っていると解釈した。このあとマクベスが「バンクォーを突然の不幸が襲うことを匂わせているのに、彼女がそれに気が付かないはずがない。それでも彼女はそれをやめさせようとしただけでなく、バンクォーと彼同様無害な彼の子供を殺害することの、都合の良さとは言わないまでも、その容易さを示唆してさえいる」というのである。³⁹確かに、彼女のこの台詞の前後でマクベスの態度に変化が見られる。彼はこの瞬間から、積極的に殺害を計画し、実行するのだから、彼は彼女の台詞で悪事を重ねていく決心をしたのだと考えることができる。しかし、彼女の側にその意図があったかどうかは疑問である。二人ともバンクォーか彼の子孫の誰かに暗殺されて王位を奪われることを恐れているものの、この二人に、このあとの殺害に彼女が関与している様子は見られない。マクベスが恐ろしい企みを暗示すると、彼女は驚いて「何がやってのけられるの」(What's to be done?)と聞いているのに対し、それを見て彼は「おまえは何も知らなくていい、かわいいやつ、やったあとで褒めてくれ...」(Be innocent of the knowledge, dearest chuck,/ Till thou applaud the deed...)と言って、一緒に退場するのである。ダンカン暗殺以後の殺害も彼女主導とは考えにくいだろう。それでも、残念ながら、と言うか幸い、彼女は以前の気迫を込めて彼らの命も永遠ではないと

言っただけで、彼女の演技は「見解」にある彼女の考えを十分伝えるものではなかった。この場面のシドンズ夫人は、ケンプルの苦悩を共有し、和らげることに集中していて、この台詞の瞬間以外は終始とても悲しげで、落ち込んだ様子であった。⁴⁰そのため、たとえ彼女にその意識があったとしても、観客の目には、彼女がバンクォーたちの殺害を示唆したように見えなかったのである。

第3幕第4場「宴の場」で、二人は王と王妃として登場し、シドンズ夫人は黒い服を着て、頭にはティアラと小さな冠が輝いている。二人は明るく客たちを迎えるのだが、ケンプルが席を立て暗殺者たちと話をしに行くと、「彼女は次第に落ち着きを失い、ついには自分も席を立て彼に話しかけ」た。⁴¹ギャリックは、ここで亡霊の姿を目にすると、「まるでワインの中に蜘蛛が入っていたかのように」グラスを投げ、全身で恐怖を表現して喝采を浴びることができたのだが、⁴²ケンプルは、同じように驚いてカップを投げても、恐怖は押し殺した。そして、彼はここで、ロバート・ロイドの案を採用し、亡霊を登場させず、その存在と血まみれの髪を彼に向かって振っている様子をマクベスの台詞だけで表現するという新しい演出を試みた。⁴³第2幕での短剣のように、亡霊の姿は精神錯乱に陥っているマクベスを演じているケンプルの想像力の中にしか存在せず、彼は誰もいない空間に目を向けた。観客も宴の客たちと同じように亡霊を見ることができない。一方シドンズ夫人は、彼が「席がない」(The table's full.)と言うと、不安を隠しきれなくなった。⁴⁴

どう違うのか分かりづらいのだが、「バンクォーは'ghost'であって、観念として言葉でのみ描かれるべきものである。反対に、『ハムレット』に登場するハムレットの父親は'apparition'であり、これは演じるべき役である」と、ケンプルは亡霊の違いを定義している。⁴⁵ハムレットの父の亡霊はハムレット、ホレイショー、歩哨たち、城の見張りに立つ全員がその姿を見ることができのに対し、マクベスの目にしか映らないバンクォーの亡霊は、マクベス夫人が言うように彼をダンカンが眠る部屋へと導いた短剣同様、彼の錯乱した心が作り出した幻に過ぎないのかもしれない。それでも、第3幕の「王妃の部屋の場」では、なぜか亡霊はハムレットにしか見えず、ガートルードにはその姿を見ることも声を聞くこともできない。この場面の状況と同じである。亡霊の違いを定義するよりも、シェイクスピアは亡霊を自由に創造していると考えべきだろう。しかし、決定的な違いもあるし、舞台上での扱いとなると事情も異なる。ハムレットの父親の亡霊は「話す」のである。しかも、かなり長い台詞である。舞台上の人物全員がその姿を恐れ、息子のハムレットに自分が殺されたいきさつを語り、復讐を誓わせる彼の亡霊は、俳優が演じなくて

は上演が困難になるし、観客にも理解しづらくなってしまふ。第1幕で登場させたのであれば第3幕でもそうしないと不自然である。一方、マクベス以外舞台上の誰一人その姿に反応しないバンクォーの亡霊なら、たとえ、フォリオに「亡霊登場」のト書きがあり、登場させるのがシェイクスピアの時代からの伝統であったとしても、むしろ登場させないのも妥当な考えといえるだろうし、舞台効果の点でも高く評価できる。彼はこのすばらしい演出を1794年4月21日、新しいドルーリー・レイン劇場で試みて以来、1803年秋にコヴェント・ガーデンに移ってから初めのうちは続けていたのだが、一部の口うるさい観客、批評家からの批判もあって、⁴⁶残念ながら、後に亡霊を登場させることにした。しかし、この演出は、後にアメリカではエドウィン・フォレスト (Edwin Forrest, 1806-72)、エドウィン・ブース (Edwin Thomas Booth, 1833-96)、イギリスではヘンリー・アーヴィング (Sir Henry Irving, 1838-1905) をはじめ多くの俳優たちに受け継がれ、アーヴィングはさらに亡霊の登場を青い光で表現するという演出に発展させた。⁴⁷

マクベスの様子がおかしいことに気づいたロスが皆に席を立つよう促すと、プリチャード夫人は玉座で、内心のいらだちを隠しつつ、客たちに「次々と微笑んだり、小さな声で話しかけたり、挨拶を送ったりし」て、彼らの注意をギャリックの動揺から晩餐の楽しみへ逸らそうと努めたのだが、⁴⁸シドンズ夫人はすぐに玉座から降り、客たちにかけてままでいるようよう懇願しながらケンプルのもとへ急いだ。このときの彼女の鋭い眼差しは共演した俳優たちにも強烈な印象を残している。エドワード・マンギンは、「彼女が厳粛な晩餐で玉座から降りて怯えている夫を叱りに行く時など、彼女の目は鋭く輝いていて、舞台のかなり離れたところからでもその輝きを見ることができた」と語り、⁴⁹また、若い頃、彼女にそのような表情を投げかけられたことを忘れることができないヘンリー・カーリングは、「マクベス夫人を演じているときの彼女の眼力は女王の威厳をすべて備えているようだった」と言っているほどである。⁵⁰彼女はケンプルの腕をつかむと、「それでも男なの」(Are you a man?) と、声を押し殺し、強い口調で話しかけた。彼女は再び軽蔑を込め、「どうしてそんなに顔をしかめるの。あなたはただ椅子を見ているだけよ」(Why do you make such faces? When all's done,/ You look but on a stool.) と言うときには、彼の耳元で話し、彼女の様子は「まるで日常の物体に彼を連れ戻そうとしているかのよう」であり、彼女の不安は観ている者の心にも伝わり、「息もつかせぬもの」だったとベルは言っている。亡霊が消えて落ち着きを取り戻してもなお、確かに亡霊を見たと言うケンプルを、「いい加

減にして。恥ずかしくないの」(*Fie, for shame!*)と小声でたしなめて、彼女は席に戻った。⁵¹

しかしケンプルが話の途中でいきなり「さがれ。消え失せろ...」(*Avaunt! and quit my sight!...*)と叫ぶと、彼女は再び激しい苦痛に心をかき乱されるが、席を立てて客たちに優しく、「どうか、皆さん、いつものことです...」(*Think of this, good peers,/ As a thing of custom...*)と話しかけた。一方、ケンプルは、力強く、勇敢に立ち上がり、「俺は、男のすることならどんなことでもやってみせる...」(*What man dare, I dare...*)と、亡霊を怒鳴りつけて退かせた。⁵²これは、もちろん、亡霊の2回目の登場ではマクベスの台詞が挑戦的なものとなっているからである。彼と同時代のマクリーディー (William Charles Macready, 1793-1873) が、ここで台詞の内容とは裏腹に、恐怖で声もかすれ、何とか台詞を言い終えたあと、マントで顔を隠して悲鳴と共に椅子に腰を落としたのをベルは賞賛しているが、⁵³彼はここでも、魔女たちと出遭ったときのように、過度に動揺しなかった。そのため、批評家に「ケンプル氏は『震えている』と言ってはいるが、怖がっているようには見えなかった」と批判されることにもなったのである。⁵⁴ギャリックでさえ、1744年に亡霊の2回目の登場では一回目ほど怖がらないように演技を変えて批判されている。⁵⁵亡霊を恐れるマクベスへの観客、批評家の期待は、以前から大きかったのである。マクベスがここで怖がっているという解釈は、おそらく、このあとの「自分だけが恐怖で青ざめている」(*When mine is blanched with fear.*)という彼の台詞によるものだろう。しかし、時代の好みを別にすれば、台詞も挑戦的であるし、王位に就いて臣下たちを招いているという彼の状況を考えると、恐怖で青ざめながらも勇敢に亡霊に立ち向かおうとしているマクベスという解釈も否定できないはずである。

また、シドズ夫人も独特な考えを持っていた。前述のように、マクベス夫人はバンクォー父子の殺害を夫に示唆したので、その罪の意識のため、亡霊の2回目の登場は彼女の目にも見えているというのである。⁵⁶しかし、彼女のここでの演技は、ベルによると「再び激しい苦痛に心をかき乱される」だけである。⁵⁷クリーマンは、これが「このとき亡霊の姿を見たことをかすかに示そうという試み」と考えたが、⁵⁸観客の目には、やはり、マクベスが取り乱してダンカン殺害を話してしまうのではないかという不安に再び襲われたためと映るだろう。もちろん、台詞の内容から考えて彼女がここで怯えるわけにはいかなさうだが、もし彼女がそのような意図していたとしたら、彼女の演技力で亡霊を見たことを表現できなかったとは考えにくい。彼女がこの奇抜なアイデアを舞台上で実践した、あるいは実践しようとしていたかどうかは疑問である。しかし、彼女がここで自分の考え通

りに演じなかったとしても、彼女の舞台の魅力を損なうものでない限り、非難すべきことではない。

亡霊が消えて自分を取り戻したケンプルにロスが何を見たというのか聞くと、彼女は震えながらも必死に、素早く玉座から降り、「どうか、声をかけないで、ますますひどくなります...」(I pray you, speak not; he grows worse and worse;...) と、彼がダンカン殺害を話してしまうのではないかという不安で息を詰まらせながら言った。しかし、彼女がマクベス夫人の気力を見せるのもここまでである。皆が退場したあと、ケンプルに夜がどれくらい更けたかと聞かれて「そろそろ朝と争い初めて、どちらとも言えない頃よ」(Almost at odds with morning, which is which.) と答えるときには、彼女は「とても悲しげで、すっかり疲れきった」様子であった。そして、ここまで来たら殺戮を繰り返すのもやむを得ないという彼に、眠りが必要と優しく声をかけるときには、「あたかも彼女の最後の病氣と運命を予感させるような」弱々しさを見せた。二人の退場は、第1幕第5場では彼女が彼の肩を軽くたたきながら、第2幕第2場では殺害後の茫然自失状態の彼を導きながらのものであったが、ここではそれらと対照的に、弱り切った彼女が彼に導かれて退場した。⁵⁹

第3幕第2場でバンクォー親子の命も永遠ではないと夫人に言われてからは、マクベスは積極的に暗殺を繰り返すのであるが、「宴の場」までで体力、気力共に使い果たしたマクベス夫人は第4幕には登場しない。このあと彼女が登場するのは第5幕第1場の「夢遊病の場」だけである。そしてここが、シドنز夫人の舞台の、一番のと言っても過言でない見せ場であった。彼女はマクベス夫人の気力を奪ったのは彼女自身の罪の意識や後悔の念、女性ゆえの繊細さと体力のなさに加えて、マクベスの弱さであったと考え、「見解」の中で次のように述べている。

彼は、絶えず自分の惨めさを妻に吐き出していた。彼の心は、ときおり苦痛の重みを下ろすことで楽になっていたが、逆に彼女の方は、傷ついた心の痛みをその極限まで根気強く黙って耐えていた...彼女の女性らしさと繊細な身体は、すぐに罪のものすごいプレッシャーに圧倒されてしまう。しかし、彼女が生まれつきマクベスよりも気高い心の持ち主であることが分かるだろう。男女の肉体的力の差が、彼らの罪が彼らの身に及ぼした効果の違いによく表れている。彼女のか弱い身体と繊細な感情はその闘いに倒れたが、彼の頑強でより鈍感な身体はそれに耐えただけでなく、彼の悪辣さを増し、彼が身を滅ぼすまで罪を重ねさせたのである。⁶⁰

彼女の考えは作品からも裏付けられる。第3幕第2場の二人の会話が、彼らの間でそのような話が繰り返されていることを物語っている。そこではマクベス夫人が夫に、彼自身の精神衛生のためにもその晩の宴のためにも明るい顔をするように言っているのだが、彼にはバンクォーとフリーアンスが生きることが気になって仕方がない。いったんは陽気なふりをするとってはみても、すぐにその話を蒸し返す。

「ああ、妻よ、俺の胸の中はサソリで一杯だ。バンクォーも、フリーアンスも生きているんだ。」(Oh, full of scorpions is my mind, dear wife! / Thou know'st Banquo, and his Fleance, lives.)

彼女に彼らの命も永遠ではないと言われて、ようやく彼も落ち着きを取り戻している。また、バンクォーの亡霊を彼が見たときには、前に見た短剣と同じ幻にすぎないと彼女が言っていることから考えても、マクベスはことあるたびに妻に悩みを打ち明けていたことが分かる。第5幕でも明らかかなように自らも罪の意識に苛まれているというのに、そのたびに彼の関心を逸らせたり励ましたりしていたのでは、確かに、いくら強い野心を抱いていても精神的に参ってしまわざるを得ないだろう。演技はもちろんだが、彼女の作品理解もそれに基づいた役作りも確かなものである。この舞台がシドズ夫人のマクベス夫人として後世に語り継がれている理由の一つがここにある。ベルの描写がほとんど彼女の演技についてであり、またケンプルの演技が、特にギャリックのものとは比べると、おとなしくなっているのも、単に彼女の演技が圧倒的にすばらしかっただけではなく、この二人のコンセプトが(二人の間で舞台のコンセプトが入念に話し合われていたはずである)これはマクベスの悲劇であるのに劣らず、あるいはそれ以上に、夫を国王にするために身も心も犠牲にしてまで彼を支え続けた夫人の悲劇でもあるというものだったからだろう。

シドズ夫人の「夢遊病の場」は観客に異常なほどの衝撃を与えるものであった。息をのむ満員の観客が見つめる中、彼女は白いサテンの服を着て、足早に登場した。これは当時狂人の服装として舞台で用いられていたもので、マクベス夫人は気が違っていただけではないのだが、彼女は敢えて伝統を破ったのである。⁶¹ここでのマクベス夫人の動作は、医師と侍女の会話に描かれている。枕もとに置いてあった蠟燭を片手に持ち、目は開いているが何も見えていない夢遊病の状態である。ベルはマクベス夫人がゆっくりと、たどたどしい足取りで登場する方が自然だと思ったが、シドズ夫人は突然現れ、足早にテーブル

ルに行くと、灯りを置いて手をこすり始め、ときおり片方の手で水を持ち上げる仕草を交えた。⁶²これは、前述のように、蠟燭を片手で持ったまま手をこするプリチャード夫人の演技に対する挑戦でもあった。

ダンカンを暗殺したことを思い出しながら、「一、二...」(*One: two:...*)と鐘の音を数えるとき、彼女は真剣に耳を傾け、「...さあ、時間よ...」(*...why, then 'tis time to do't...*)と言うときは耳慣れない不自然な囁き声だった。とても憂鬱な声で「フアイフの領主には妻がいた。彼女は今どこかしら」(*The thane of Fife had a wife: where is she now?*)と言ったあと、いきなり気むずかしい表情になり、「ああ、もうこの手は二度と、きれいにならないのかしら...」(*What, will these hands ne'er be clean?...*)と言った。再び思いが国王殺しに及ぶと、「もう、よして、あなた、もうそんな話はやめて。そんなに怯えていたら全部台無しよ」(*No more o' that, my lord, no more o' that: you mar all with this starting.*)と、熱心な囁き声で言った。手を顔に持って行き、「まだ染みが消えない...」(*Here's the smell of blood still:...*)と言うときには、彼女の意識に染みついている忌まわしい血の匂いに顔をしかめた。「...アラビア中の香水を使っても、この小さな手はいい香りにならない。ああ、ああ、ああ。」(*...all the perfumes of Arabia will not sweeten this little hand. Oh, oh, oh!*)「何というため息だ」(*What a sigh is there!*)と医師が言う彼女のこの叫び声は、とても恐ろしい身震いと共に発せられ、単なるため息ではなく、その中に精神錯乱の声があったとベルは記している。⁶³このあとマクベス夫人は事件の発覚を恐れて、怯えている夫を寝室に急がせたのを再現しながら退場するのだが、ベルはここで彼の詳細な注を終えている。

シドンズ夫人は、実際に夢遊病の患者を観察して自らの役作りをしたため、彼女のこの場面は非常にリアルなものとなり、観客を震撼させた。この場面で彼女が観客に与えた衝撃は、アイルランドの劇作家シェリダン・ノウルズが以下のように伝えている。

ピットもギャラリーもボックス席も息が詰まるほどの満員だったが、彼女を見ているときはまるで墓地の冷たい空気が立ちこめているようだった。真夜中の納骨堂の静けさと湿り気があったのだ。あたかも自分と医師と侍女だけが彼女と一緒にいるようだった。ぞっとして息が苦しくなった...⁶⁴

また、彼が度々彼女の舞台を観ていたのを知っていたエドウィン・フォレストに、彼女の

「夢遊病の場」を一言で描写してみてくださいと言われたときには、彼は身震いしながら「血の臭いがした。断言する、確かに血の臭いがした」と話した。⁶⁵これは、彼女が観客に与えた衝撃の強さと恐怖の大きさを最も如実に物語るエピソードとして、彼女の舞台を語る上で欠かせないものとなっているのである。

シドズ夫人もプリチャード夫人も、自らの野心と意志の強さで夫の野望を助け、彼に国王殺しを実行させる強いマクベス夫人を演じた。プリチャード夫人はギャリックが演じるマクベスの悲劇を見事にサポートして歴史にその輝かしい名を残したのだが、ケンプル姉弟による『マクベス』ではシドズ夫人の演技があまりにも際だっていたため、ケンプルが彼女の演技を支えているような印象を与えるものとなった。決して、ケンプルがギャリックより優れていなかったわけではない。それでも、彼女のこの役柄に対する理解の深さとそれを表現する卓越した演技が、ケンプルのマクベスを圧倒するほど観客の心を捉えたのである。彼女の「見解」からも明らかなように、おそらく、彼女ほどこの役柄を理解し、深い共感を抱いて演じた俳優はいなかっただろう。

冒頭で引用したエピソードからも分かるように、シドズ夫人の演技は、彼女が舞台を離れてもマクベス夫人と思われてしまうほど、強い印象を観客に与えるものだったのだが、彼女は自分がイメージするマクベス夫人を、完全に思い通り表現できたわけではなかった。ハーロウを始め何人もの画家が彼女の美しさを描いている。中でもレノルズ卿が描いた「悲劇の女神」などは、画家が恋愛感情を抱いていたのではないかと思われるほどの美しさである。彼女が想定した女性らしい魅力を演じるには十分である。しかし、彼女は「見解」の中でマクベス夫人を「美しく、女性らしく、と言うよりもきつとか弱くさもある」と言っている。⁶⁶「か弱い身体と繊細な感情」の持ち主だとも述べている。⁶⁷決して太っていたわけではなかったが、彼女は「か弱く」は見えなかった。そのため、プリチャード夫人の印象も手伝って、結果的には強いマクベス夫人を印象づけることになってしまったのである。それが、皮肉にも当時の観客の期待や好みと一致して、彼女の人気にも貢献し、最も衝撃的で魅力的な伝統的マクベス夫人となったのである。しかし、俳優とはそういうものである。ケンプルも身長、容姿、貴族的雰囲気を持ち合わせてはいたが、通らない声を劇場の隅々まで届かせるために発声を工夫し、トーンを抑え気味に発音したために、過剰な感情表現ができず、演技の堅苦しさを非難されることもあったが、自ら作り上げた演技スタイルで、姉と共に一時代を築くほどの演技を見せたのである。他の俳優も皆、多かれ少なかれ同じような闘いを強いられている。観客の強い思い込みもあって、彼女が演じるマ

クベス夫人のか弱さが十分伝わらなかったことは残念であるが、彼女の「見解」と舞台がマクベス夫人の人物像に複雑さと深みを与え、後の舞台に大きく貢献したことは特筆に値する。マクベス夫人の強固な意志と身体のか弱さとのアンバランスは、後に百数十年の時を経て、1955年にバイヤム・ショーの演出によるローレンス・オリヴィエ（Sir Laurence Kerr Olivier, 1907-89）の『マクベス』で、ヴィヴィアン・リー（Vivien Leigh, 1913-67）が見事に演じている。

注

- 1 Sylvan Barnet, 'Macbeth on Stage and Screen', Sylvan Barnet (ed.), *Macbeth* (Penguin Books, 1986), p.191.
- 2 この論文の中の引用は、劇評等からはそれらからそのまま引用したが、それ以外はバーネットのペンギン版を用いた。
- 3 ダヴェナントの改作については、ファーンズのヴェリオラム版に印刷されている73年版を参考にした。Horace Howard Furness Jr. ed., *A New Variorum Edition of Shakespeare: Macbeth* (Dover Publications, 1963) pp.507-543.
- 4 Samuel Pepys, quoted in Bernice W. Kliman, *Shakespeare in Performance: Macbeth*, 2nd ed.(Manchester Univ. Press, 2004), p.19.
- 5 Barnet, pp.188-9.
- 6 Kalman A. Burnim, *David Garrick: Director* (Univ. of Pittsburgh Press, 1961), p.117.
- 7 Mrs. Siddons, 'Remarks on the Character of Lady Macbeth', Thomas Campbell, *Life of Mrs. Siddons* (Effingham Wilson, Royal Exchange, 1834), vol.II, pp.35-6.
- 8 ただし、この時マクベスを演じたのは当時優雅な風貌と仕草で「紳士のスマス」とあだ名されていた俳優のウィリアム・スマス（William Smith, 1730-1819）で、ケンプルがドルーリー・レインに来たあともしばらくは悲劇で主役を演じていたのだが、残念ながらシドズ夫人のマクベス夫人に釣り合うほどの演技力はなかった。
- 9 Campbell, vol.II, pp.36-9.
- 10 *Ibid.* p.10-11.
- 11 William Winter, *Shakespeare on the Stage*, 1st series (Moffat, Yard and Co., 1911), p.463.
- 12 *Critical Observations on Mr. Kemble's Performance* (1811), p.22, quoted in Dennis Bartholomeusz, *Macbeth and the Players* (Cambridge Univ. Press, 1969), pp.125-6.
- 13 ベルは1809年頃この舞台を見て、彼女の演技をテキストに注として書き込んだ。ベルの注はジェンキンが再現し、マッシュューズが編集した本に収められている。H. C. Fleeming Jenkin, 'Mrs. Siddons as Lady Macbeth and Queen Katherine', Brander Mathews (ed.), *Papers on Acting* (The Colonial Press, 1958), pp.81-96.
- 14 *Morning Post*, February 3, 1785. Bartholomeusz, p.103. Kliman, pp.31-2.
- 15 Sheridan Knowles, *Dramatic Literature*, p.133, quoted in Bartholomeusz, p.104.
- 16 Jenkin, p.82. Cf. James Boaden, *Memoirs of Mrs. Siddons* (Henry Colburn, 1827), vol.II, pp.134-5. ボーデンの描写と解説は1785年の舞台についてであり、台詞も「気が違った」だけが強調されている（Thou'rt MAD to say it.）
- 17 *Ibid.* p.83.
- 18 *Ibid.*
- 19 J. H. Siddons, 'Random Recollections of a Life', *Harper's New Monthly Magazine*, XXVI (December 1862), quoted in Bartholomeusz, p.126.
- 20 Jenkin, p.84.
- 21 *Ibid.*
- 22 *Ibid.*
- 23 *Ibid.* p.85.
- 24 *Ibid.*
- 25 *Ibid.* p.86.

- 26 Campbell, vol.II, p.18.
- 27 Jenkin, p.86. スプレイグは、ここに「そのときはおしまいよ」というようなあきらめのトーンを読み取っているが、彼女の演技の流れから考えて、そのようなトーン・ダウンは考えにくいのではないか。ベルの注には「驚いて（の台詞）ではない」とだけ書かれている。Cf. Arthur Colby Sprague, *Shakespearian Players and Performances* (Adam and Charles Black, 1954), chap.4, p.62. また、彼女が、その俳優人生のなかでこの台詞に3通りの言い方を試したことも有名である。初めは「軽蔑を込めた疑問文」次に「驚きと怒りを込めて『私たちが』を強調した言い方」そして「低くしっかりした声での平叙文」Sprague, chap 4, n., p.190. おそらくベルが見たのは2番目の言い方、スプレイグが考えたのは3番目の言い方に基づいたのだと思われる。
- 28 Jenkin, p.86.
- 29 *Ibid.* pp.87-8.
- 30 Winter, p.461.
- 31 *Memoirs of a Journalist* (1873), Sprague, p.62.
- 32 Jenkin, p.88.
- 33 *Ibid.* p.89.
- 34 *Ibid.* pp.90-1.
- 35 *Ibid.* p.91.
- 36 Campbell, vol.II, pp.22-3.
- 37 Jenkin, p.92.
- 38 *Ibid.*
- 39 Campbell, vol.II, p.30.
- 40 *Ibid.* p.22-3. Bartholomeusz, p.102.
- 41 Jenkin, p.92.
- 42 *Critical Observation*, p.25, quoted in Bartholomeusz, p.134.
- 43 「国王だけがそこに亡霊の姿を想像し/ 誰もいない椅子を見て話し、震えるべきである。」Robert Lloyd, *Actor*, p.15, quoted in Bartholomeusz, p.133.
- 44 Jenkin, p.92.
- 45 Herschel Baker, *John Philip Kemble* (Harvard Univ. Press, 1942), p.186.
- 46 キャンベルは、「われわれが純粋に理性で判断するなら、間違いなく亡霊は舞台から消し去るべきであるが、迷信で空想を調節するのであれば、われわれは幽霊にも姿を見せる特権を与える」と、亡霊の登場を望んでいる。Campbell, vol.II, p.187.
- 47 Arthur Colby Sprague, *Shakespeare and the Actors* (Cambridge Univ. Press, 1944), pp.256-7.
- 48 Thomas Davies, *Dramatic Miscellanies* (1784), vol.II, p.166, quoted in Marvin Rosenberg, *The Masks of Macbeth* (Univ. of Delaware Press, 1978), p.452.
- 49 Edward Mangin, *Piozziana* (1833), p.85, quoted in Sprague, *Shakespearean Players and Performances*, p.64.
- 50 Henry Curling, *Recollections of the Mess-Table and the Stage* (1855), p.77, quoted in Sprague, *Shakespearean Players and Performances*, p.64.
- 51 Jenkin, pp.92-3.
- 52 *Ibid.* p.93.
- 53 *Ibid.* pp.93-4.
- 54 *Critical Observations*, p.25, quoted in Bartholomeusz, p.134.
- 55 Bartholomeusz, pp.67-8.
- 56 Campbell, vol.II, pp.30-1.
- 57 Jenkin, p.93.
- 58 Kliman, p.37.
- 59 Jenkin, p.94.
- 60 Campbell, vol.II, pp.32-3.
- 61 Kliman, p.32.
- 62 Jenkin, p.95.
- 63 *Ibid.* p.96.
- 64 James Sheridan Knowles, quoted in Sprague, *Shakespearian Players and Performances*, p.67.
- 65 W. R. Alger, *Life of Edwin Forrest* (1877), vol.II, p.545, quoted in Sprague, *Shakespearian Players and Performances*, p.67.
- 66 Campbell, vol.II, p.11.
- 67 *Ibid.* p.33.

その他参考文献

大場建治 『英国俳優物語 エドマンド・キーン伝』(晶文社、1984年)

大場建治他編 『シェイクスピア大事典』(日本図書センター、2002年)

Phyllis Hartnoil (ed.) *The Oxford Companion to the Theatre*, 4thed. (Oxford Univ. Press, 1985)